

Spiritualism News Letter

2009
第 47 号

10月1日発行

スピリチュアリズム・ニューズレター

発行/スピリチュアリズム・サークル 心の道場

発行人/小池里予

〒441-3141 愛知県豊橋市大岩町字北山468-1

TEL 0532-41-0537 FAX 0532-41-8257

ホームページアドレス <http://www5a.biglobe.ne.jp/~spk/>

今月の内容

- ・スピリチュアリズムと進化論
霊的観点から見た進化論について……………1
- ・「続スピリチュアリズム入門」(新版) 紹介……………15
- ・スピリチュアリズム・トピックス “人間の愛が植物を育てる” ……24
- ・第8回 公開ヒーリングのお知らせ……………31

スピリチュアリズムと進化論 霊的観点から見た進化論について

2009年は、「進化論」を唱えた英国のチャールズ・ダーウィン(1809～82年)の生誕200年です。これをきっかけに世界各地で「進化論」に関する議論が活発に行われています(*ダーウィンによる『種の起源』の出版は1859年)。

大半の日本人は、進化論は科学的に証明された常識であって、今さら何で議論なのかと思うかもしれませんが。進化論に反対するのは、時代遅れのキリスト教原理主義者の妄信的な反動かと考えるかもしれません。最近のアメリカでは、進化論に関する議論が大統領を巻き込んだ社会的出来事になりました。

キリスト教では、「神」が人間や動物を含むあらゆる生命体を創造した、と主張します。それに対し進化論では、神が生命体を創造したのではなく「進化の必然的な経過」によって多種類の生物種が発生するようになった、と反論します。もちろんスピリチュアリズムでは「神」が人間や生物を創造したものと考え、無神論的な進化論に反対します。

今回は「進化論」に対する問題を取り上げ、霊的観点に立ったスピリチュアリズムの見解を学ぶことにします。



【1】進化論に関する背景と、進化論をめぐる最近の動き

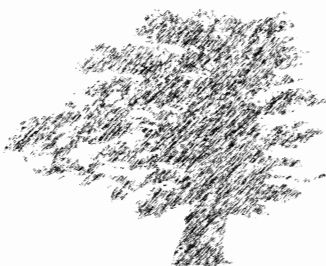
創造論か、進化論か

生命界の無数の種の存在を説明する理論は、突き詰めると「創造論」か「進化論」のいずれかに属することになります。創造神を信じるキリスト教やイスラム教では、当然、生物界の多様性は「神の創造の業」によるもの、生物（生命体）は神によって造られたものと考えます。

それに対し創造神の存在を信じない無神論者や唯物論者は、生物界の多様な種は、「偶然の進化の結果」として存在するようになったものと主張します。進化のプロセスの結果、地球上に無数の種類の生物が存在するようになったと考えるのです。このように進化論は、神が生命体（生物）を造ったという創造論を否定します。

もっとも進化論といってもさまざまな考え方があり、進化論を名乗ってはいても内容的に違いがあります。しかし神の存在と神の創造を認めないという点では、いずれの進化論もほぼ共通しています。進化論は神の存在と神の創造性を否定することで、無神論と唯物論に通じます。「進化論」の根底にある思想は、自然を超越した創造神・全知全能の神の存在を否定する「無神論」であり「唯物論」なのです。

一方、創造論と進化論を折衷したような見解も現れています。創造論と進化論を融合させ、神が働きかけた結果、進化が引き起こされたとするものです。これは神が進化を手段として用いて、多様な生物界を造ったとする考え方です。



先進諸国への進化論の浸透

近代以降、科学の発展にともない、進化論は人類の中に広く受け入れられるようになりました。現代先進諸国の多くの人々が、進化論は科学的に立証された真実であるかのように思っています。2005年の欧米・日本・トルコなど32カ国を対象にした調査によれば、デンマーク・スウェーデン・フランスなどのヨーロッパ諸国では、国民の8割以上が進化論を受け入れていることが分かりました。

ダーウィン生誕200年に際しては、ヨーロッパの宗教界は進化論を神の教えに反するものとして敵視してきたこれまでの在り方を改め、進化論と和解する姿勢を打ち出しています。おそらくこうした動きの背景には、かつてキリスト教が天動説に執着して地動説を長いあいだ認めなかったことへの配慮が働いているものと思われます。科学との対立を極力避けて歴史上の失敗を繰り返さないようにしようとする考え方が、そうした形で現れたものと思われます。

英国国教会は、進化論は神の教えに背くというイメージは誤ったものであるとし、ダーウィンの研究成果をウェブサイト上で賞賛しました。カトリック教会の公会議も、進化論はキリスト教と両立すると表明しました。自然淘汰は、神が生命を生み出すために造ったルールであるとして、進化論と対立する姿勢を避けたのです。

※イタリアは、第二次大戦までカトリックが国教であったように、キリスト教の影響力が現代においても強い国家です。当然、他のヨーロッパ諸国と比べ「神による創造論」を支持する傾向が強く、2004年には進化論が一時、文部省令によって中学の教科書から削除されるといった事件が起こりました。

それに対し直ちに大反論が巻き起こり、「進化論も学校で教えるべき」との見解のもと、教科書に復帰することになりました。

米国内における最近の進化論論争

現在の先進諸国の多くが進化論を受け入れる方向に歩み出している中であって、米国は特殊な立場に立っています。先に引用した調査では、ヨーロッパ諸国が進化論を肯定する方向に向かっているのに対し、米国では進化論を受け入れる人は14パーセントにとどまり、国民の3分の1が明確に進化論を拒絶しています。進化論を受け入れる国民の割合は、イスラム国（トルコ）に次ぐ低さを示しています。

また米国のハリス世論調査によれば、人間が類人猿から進化したと考えている米国人は1995年には44パーセントでしたが、その後の10年間で38パーセントに減少しています。反対に進化論は間違いだと考えている人は46パーセントから54パーセントに増加しています。さらに別の世論調査では、米国人のほぼ8割が「学校で進化論だけを教えるのはよくない。進化論の反証も教えるべきである」と考えていることが明らかにされています。

こうした進化論反対の動きが活発化した理由として、ブッシュ前大統領の影響を挙げられる人もいますが、実はその根底にはもっと複雑な背景があったのです。

20世紀初期の近代科学の隆盛にともない、米国内でも進化論が広がりを見せることになりました。そうした動きの中であって、聖書を文字どおりに受け入れる福音派（*特に保守派）は、聖書の教えと食い違うとして進化論に徹底して反対する立場を貫いてきました。1925年、テネシー州でのスコープス裁判において、進化論反対派の勢いは頂点に達しました。この裁判はテネシー州の理科の教師ジョン・スコープスが進化論を教えたとして訴えられたものです。スコープスには罰金刑が言い渡され、それを機に米国における進化論の勢力は後退し、進化論は教科書から消えることになりました。

ところがその後、米ソ冷戦期の1957年、ソ連が米国に先駆けて人工衛星スプートニクの打ち上げに成功しました。これが米国内にショックを与え、科学教育重視の傾向が一気に高まることになりました。そうした動きにともない、進化論が相次いで教科書

に復活することになったのです。反進化論サイドは各地で裁判を起こしてこの動きに対抗しようとしたが、連邦最高裁判所が政教分離の原則に基づき創造論教育を違憲とし、反進化論運動は急激に衰退することになりました。

創造論の劣勢傾向の中で、宗教色を前面に出さない形で進化論に対抗する理論として登場したのが「ID論（インテリジェント・デザイン）」でした。ID論は——「宇宙や生物の成り立ちは自然淘汰などの無作為な過程ではなく、何らかの意図を持った知的設計者（インテリジェント・デザイナー）によるものとする方がよりよく説明できる」という考え方です。従来キリスト教が「神」と呼んでいた存在を「知的設計者」と表現したことで、これまでの宗教色の濃い創造論とは異なるイメージづくりに成功しました。ID論者は、神という言葉を意識的に避けて進化論を否定し「創造説」を主張したのです。



こうして米国内では反進化論運動が、キリスト教的な表現を避けた I D という新しい理論のもとで、再び力を得ることになりました。もっとも米国の反進化論者がすべて I D 論のもとに結束しているわけではなく、依然として聖書を前面に押し出して神の創造の業を主張する宗教的立場（キリスト教原理主義的立場）もあります。しかし「I D 論」を中心とした反進化論運動は徐々に勢力を拡大し、あと十年もすれば、I D 論は教科書に載るようになるかもしれないとまで言われています。

スピリチュアリズムはキリスト教と同じく「創造論」の立場に立ち、無神論的進化論を否定します。したがってスピリチュアリズムは、こうした米国で展開している反進化論運動に全面的に賛成します。この運動が成功を収め、創造論が支配的になることを心から願っています。

I D 論は、生物界の全存在は未知の叡智の力と設計によって生まれた、とするものです。I D 論における「知的設計者」とは、言うまでもなく宗教における「神（創造神）」を意味しています。これに反対する進化論者は——「I D は神に言及していないが、背後には聖書の天地創造を教えようとの狙いがある。これは政教分離に抵触し、憲法違反だ」と反発を強めています。現在では「学校教育では進化論以外の思想（I D 論）も教えるべきである」という意見と、「I D 論という創造論は健全な学校教育を阻害する」という意見の間で、激しい法廷闘争が続けられています。

スピリチュアリズムは、従来の伝統的なキリスト教の聖書の教えには反対しますが、神の創造論には全面的に賛成です。I D 論は、スピリチュアリズムの見解と全く同じ思想なのです。

時代遅れの仮説になりつつある「進化論」

これまで進化論は、常に創造論との対立関係の中で論じられてきました。そして創造論は宗教の立場を代弁し、進化論は科学の立場を代弁するものとされ、宗教と科学の対立構図として描かれてきました。現代先進諸国ではこの構図がほぼ常識となり、“進化論は科学的である”という理由から無条件に正しいものとされてきたのです。創造論を主張する理論がこれまでほとんど提示されてこなかったことも、進化論を優位な立場に押し上げることになりました。こうしてつい最近まで、圧倒的に進化論が優勢な状況が続いてきました。

しかし進化論をめぐる論争は、最近になって大きく変わろうとしています。創造論と進化論の対立は、宗教と科学の対立構図と同じであるとの見解が、根本から変化しようとしているのです。それは最新科学の登場によって進化論の矛盾が明らかになり、進化論の正当性を主張する根拠が失われるようになったためです。従来古い科学（近代科学）に立脚してその正当性を主張してきた進化論が、“分子生物学”という最新の科学によって根底から理論的根拠を覆されようとしているのです。

これまで進化論の正当性を示すとされてきた根拠の誤謬^{ごびょう}が次々と立証されて、進化論は今や単なる仮説、あるいは時代遅れの説になろうとしています。これが進化論問題の最前線の動向なのです。



再び「創造論」が優位になりつつある

現在では進化論の間違いに直面して、進化論を捨て去るような科学者が続々と現れるようになっていきます。進化論の理論的崩壊にともない、米国では創造論と進化論が対等に議論する場が持たれるようになっていきます。それを通して「創造論の方が、進化論より正当性があるかもしれない」と考える研究者が増え始めています。多くの科学者が、進化論は今や根拠のない仮説に成り下がっていると思っています。そうした中で進化論にいつまでもしがみついている人間は、狂信者と同じであると言われるようになるかもしれません。

「神が生命体（生物）を創造した」と言うと、無神論者や唯物論者は、決まって進化論を持ち出して反論してきました。地球上の種々の生命体は神が造ったものではなく、進化のプロセスの結果として存在するようになったと主張してきました。進化論は現在まで、神の創造説に反対する唯物論的な代表的見解として、多くの科学者によって支持されてきました。

しかし現代では、これまで進化論の正当性を示すとされてきたさまざまな根拠が覆されるようになり、進化論は時代遅れの一つの仮説として位置づけられようとしています。ダーウィンの唱えた進化論は、学会の中ではすでに過去の遺物になっていますが、その後に考え出され、現在主流になっている「進化論（総合進化論）」も正当性を主張する根拠を失って衰退し、反対に「創造論」が優位になろうとしています。

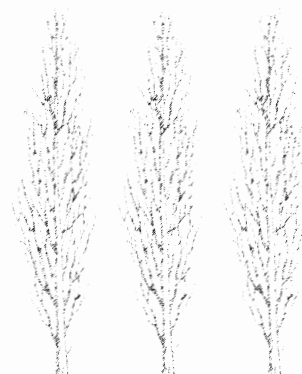
※日本では「進化論」に関する認識がきわめて遅れていて、高校の教科書では進化論が科学的に証明された事実であるかのように書かれています。現在の進化論の記述は、それほど遠くない時期に全面的に書き改められることになるでしょう。

これまで進化論を無条件に正しいものとして教育を受けてきた日本人には、最近、米国内で活発に行われるようになった進化論論争の意味が全く分かりません。アメリカ人の多くが、いまだに前近代的な信仰に固執してい

るといった程度の見方しかしていません。キリスト教会サイドからの時代錯誤的な反抗としか考えられないのです。

しかし最近の進化論論争は、科学的な根拠をもとにしたきわめて次元の高いものなのです。時代遅れになっているのは、実は多くの日本人の常識の方なのです。

以下では「進化論」の歴史を振り返りながら、かつて進化論がどのようにして影響力を拡大し、そしてどのようにして理論的に崩壊して、現在の危機的状況を迎えるようになったのかを概観していきます。



【2】進化論の推移

進化論といえば、誰もがダーウィンの名前を思い出します。ダーウィンによる『種の起源』は1859年に出版され、そこで説かれた理論が「進化論」として現在まで引き継がれてきたと人々は考えています。

たしかにダーウィンは進化論の創始者といえますが、ダーウィンの進化論はその後の研究によって根本的な矛盾が発見され、見解の大部分は否定されることになりました。現在の進化論研究者の中で、ダーウィンの進化論をそのまま踏襲している人間はいません。ダーウィンの進化論はその根幹が否定され、別の進化論に主流の座を明け渡して現在に至っています。

進化論にもいろいろな立場がありますが——「ある種（生物）の形質（身体的特徴）が時間とともに変化すること」が進化であり、「進化が偶然に引き起こされて新しい生物（種）がつけられるようになる」とする点では、ほぼ共通しています。これが進化論の原則ですが、各進化説ごとに見解の相違が見られます。またある時代に一つの進化論が主流となり、やがてそれに批判が加えられる中で折衷的なものや

中間的なもの、部分修正的なものが現れるようになります。このように一口に「進化論」といっても、内容的にはさまざまな違いが存在します（*進化論の歴史の中で、重要な役割を果たした日本人研究者がいます。その一人が「中立説」を唱えた遺伝学者「木村資生・きむらもと お」であり、もう一人が独自の進化説を主張し当時の主流派進化論と一線を画した「今西錦司・いまにしきんじ」です）。

ダーウィンの進化論自体は否定されましたが、彼によって唱導された「進化」という考えは、20世紀に入って新しい科学知識を加えることによって一歩進んだ(?)理論に発展していくことになりました。そして対抗理論がなかったこともあり、「進化論」は一世を風靡^{ふうび}して多くの人々の心を支配し、現在に至っています。しかしその新しい進化論も、最新科学によって矛盾と誤謬が明らかにされるようになり、いつ崩壊するかもしれないという危機的状況に立たされています。

ここではこうした「進化論」の歴史的推移を概観し、進化論の問題点・間違いについて学んでいきます。



1 || ダーウィンの進化論

ダーウィンの進化論とは？

進化論はもともと、生物の多様性を説明する理論として考え出されたものです。地球上には、なぜこんなに多種類の生物がいるのかを説明する理論として、ダーウィンは「進化」という仮説を考えついたのです。ダーウィンは、英国海軍の調査船ビーグル号での航海の最中、南米沖のガラパゴス諸島で動植物を観察しているときに「進化論」のヒントを思いつきました。

ダーウィンの進化論の特徴は、「適者生存・自然淘汰」に言い表されます。自然界では適者が生き延び、自然による淘汰が生物の進化をもたらすようになる、と言うのです。この「自然選択」というきわめて単純な考えが、ダーウィン進化説の中心です。これをもう少し詳しく説明すると次のようになります。

まず「生物は環境の中で変異し、変異した内のあるものは子孫に遺伝する」そして「環境への適応性のある変異を持つものは徐々に子孫を増やし、非適応的なものは徐々に子孫を減らし、やがて絶滅する」その結果「生物の集団は環境への適応性を持つものが多くなり、新しい集団（生物種）を形成することになる」——これがダーウィンが考えた進化のプロセスであり、このようにして新しい種が形成されて地球上に多様な種が存在するようになった、と説いたのです。

ダーウィンは、環境の中で変異した新しい生物種は、環境に対する適応性さえあれば生き延び、子孫を増やすことができると思いました。これは「獲得形質の遺伝」といわれるもので、ある人間が努力して頭が良くなったら、その長所が子供にも伝えられ子供の頭も良くなるという主張に似ています（*「獲得形質の遺伝」はダーウィン以前のラマルクが説いた考えで、ダーウィンはそれをそのまま踏襲しています）。もちろんそうしたこと（獲得形質の遺伝）は実際にはあり得ないのですが、ダーウィンは後天的に獲得した資質が子

孫に遺伝すると考えていたのです。

現在では形質の遺伝は遺伝子（DNA）によって決定されるものであることが明らかにされていて、努力や環境から獲得した形質は遺伝しないことが証明されています。しかしダーウィンにはそうした遺伝学的な知識がなかったため、獲得形質が遺伝すると考える他なかったのです。ダーウィンの説いた進化説の核心部分は、現在の遺伝学によって完全に否定されることになりました。



ダーウィンとウォレス

アルフレッド・ウォレスは、ダーウィンと「進化論」の同時発見者としてよく知られています。「自然選択説」に基づく進化論の発表はダーウィンの方が一足早かったために、“進化論はダーウィンから始まる”というのが定説となり、ウォレスは論文を科学界へ公表するだけに終わってしまいました。

もしウォレスの発表の方が早かったなら、進化論はウォレスから始まるということになっていたはずですが、ウォレスは、自然選択説に基づく進化論を正しいものと確信していました。もちろん現在では自然選択説は間違いであって、科学的根拠は何もないことが分かっています。ウォレスの進化説はダーウィンと同様、間違っていたということです。進化論に関する限りダーウィンもウォレスも同じ間違いを犯し、現在では通用しない説を唱えたということなのです。

私たちスピリチュアリストにとっては、ウォレスが進化論の発見者であったということよりも、スピリチュアリズムの初期に、熱心に心霊研究を進めてきた大先輩であるという点が重要です。

ウォレスはもとは唯物論者でしたが、当時ヨーロッパを巻き込んだ初期スピリチュアリズムの動きの中で心霊研究者になり、熱心なスピリチュアリストとして生涯を送ることになりました。ウォレスは英国で初めて心霊現象を調査研究した科学者です。1865年以降、さまざまな物理的心霊現象（テーブル現象・人体浮揚現象・物品引き寄せ現象）を調査して、それらを好意的に解釈し、スピリチュアリズムへの熱烈な支持を表明しました。ウォレスは——「心霊に関する現象は、その他の科学におけるものと同様にすべて証明されるものである」との心霊研究を擁護する言葉を遺しています。

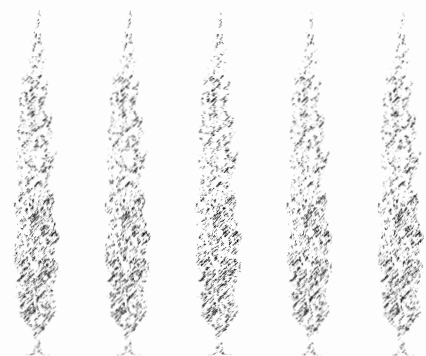
世間一般には、ウォレスは心霊研究者というより進化論の同時発見者として名前が知られています。ウォレスの進化説には、ダーウィンにはない大きな特徴があります。ウォレスは、進化にはたった一つの例外があるとしました。それは人間の心

であり、精神的成長は、自然界の他の現象とは全く違って独自の過程をたどるとしたのです。

1850年代にウォレスが進化論を発表したときには、彼はまだスピリチュアリズムを知りませんでした。しかし1860年代には、彼の考え方にスピリチュアリズムの影響が現れるようになり、今述べたような人間の進化に関する見解を発表するまでになっています。ウォレスは、人間の精神の進歩は自然選択ではなく非物質的な力が働いてなされるものであるとしました。このように晩年のウォレスは、スピリチュアリズムの影響を受けて進化論を発表した当初とは全く別の人物になっていたのです。

ダーウィンとウォレスの違いは、“交霊会”に対する姿勢にも端的に現れています。ウォレスは1865年に交霊会に出席し、その後、間もなく熱心なスピリチュアリストとしての道を歩み始めることになりました。実はダーウィンも交霊会に参加したことがあったのです。1870年代の初期、クルックスが心霊主義（スピリチュアリズム）を支持したことが、ダーウィンの心に引っかかっていた。そして1874年1月、ダーウィンは友人の勧めにしたがって交霊会に参加しました。しかしその交霊会では、ダーウィンが期待していたような特別な現象は起こらず、交霊会としては失敗に終わりました。その後、ダーウィンはスピリチュアリズムに対して距離をおくようになっていきます。

スピリチュアリズムの霊的観点からすれば、交霊会に対する姿勢の違いは、両者の霊性の差が反映したものと言えます。



2 || 総合進化論と突然変異の問題

ダーウィンの進化論から、
総合進化論（ネオ・ダーウィニズム）へ

最も古典的な「進化論」がダーウィンによって唱えられてから150年が経ちました。『種の起源』は1859年に発表されましたが、その後の近代科学の発展と並行して進化論は世界中の無神論者・唯物論者に受け入れられるようになりました。

現在の主流的な進化論は、ダーウィンの説いた単純な適者生存説・自然選択説ではなく、「突然変異」と「自然選択」を理論的支柱とするものです。現在の進化論者は、DNA（遺伝子）が偶然に突然変異を引き起こし、自然選択によって適応的DNAが生き残り、そうでないものは淘汰されると考えています。この進化論は「総合進化説（ネオ・ダーウィニズム）」と呼ばれ、1930年頃に確立されました。この進化論に対してさまざまな批判が加えられましたが、これに対抗する理論が現れなかったために、現在まで主流の立場を維持することになりました。

ここ100年の間、進化論は多くの人々に、科学的に証明された無謬の真理のように思われてきました。そして現在の大部分の日本人も“進化論は正しいもの”と思い込んでいます。しかし進化論は1950年以降に登場するようになった最新の科学（分子生物学・遺伝子工学）によって、その正当化の根拠を次々と崩されるようになりました。その結果、現在では「総合進化論（ネオ・ダーウィニズム）」は突如、根本から崩壊してもおかしくないような状況に立たされています。

連続的進化説と段階的進化説

もし進化論者の言う「自然選択説」が正しいとすれば、進化は途切れることのない連続したプロセスとなるはずですが、「変異」を連続的なものにとらえるなら、当然その痕跡が残されていることとなります。低いレベルから高いレベルに至る生物の化石が、連続して残されていることとなります。進化論者は、化石こそがその進化説の正当性を証明するものであると主張してきましたが、実はその化石がダーウィンの進化論の間違いを決定的に証明することになったのです。

近年、化石研究は飛躍的に発展しました。その化石研究の結果、進化論を支持すると考えられてきた根拠が次々と否定されるようになりました。現代の化石研究によって、進化論を支持する“中間化石”がないということが明らかにされました。化石に進化の連続性を示す証拠が全くないということ、またこれまで進化のプロセスを示すとされてきたもの（始祖鳥や馬の進化図・人間の進化図の中で示されているさまざまな化石）が中間型でないことが実証されるようになったのです（*始祖鳥は、爬虫類から鳥類に移行する“中間種”と考えられてきましたが、始祖鳥の化石が出た下部地層から鳥類の化石が発見されたため、始祖鳥＝中間種の仮説は否定されることになりました）。こうしてダーウィンの唱えた「連続的進化説（漸進的進化論）」は否定されることになりました。

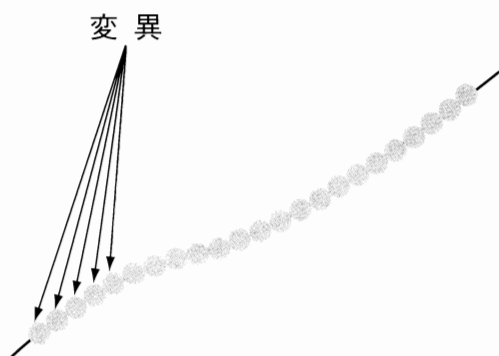


ダーウィンの進化説（自然選択説）は、いったん獲得した形質は子孫にそのまま伝わるとする「獲得形質の遺伝」を前提としていますが、先に述べたようにこの獲得形質の遺伝という大前提も、その後の遺伝学の登場によって完全に否定されることになりました。獲得した形質が、そのまま子孫に遺伝するようなことはないことが証明されたのです。このため「自然選択説」は否定され、1920年頃にはその間違いが誰の目にも明らかになり、研究者の間ではもはや見向きもされなくなってしまいました。

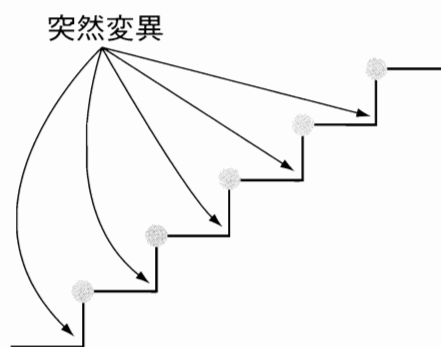
このようにしてダーウィンの「漸進的進化論」は否定されました。そうした中で当時研究が進められていた遺伝学の「突然変異」に注目が集まるようになりました。突然変異は急激な変化を引き起こし、一回の変化で全く新しい生物種を登場させる可能性があると考えられたのです。それはダーウィンのような漸進的進化ではなく、「突然変異による段階的

変化こそが進化の事実である」という新たな仮説を生み出すことになりました。こうして進化論の流れは、自然選択説から突然変異説へと変化していくことになります。

ところが本来なら相反するはずの「自然選択説」と「突然変異説」が、無理やり一つにまとめられて新しい進化理論がつくられるようになりました。それが「総合進化論（ネオ・ダーウィニズム）」だったのです。この説では従来の漸進的進化論に代わって、段階的進化論という新しいモデルがつけられました。古典的なダーウィニズムに代わって「段階的進化説（断続平衡説）」が唱えられるようになりました。それは突然変異をともなった進化が過去に発生して、これによって階段を登るように進化が促されることになったというものです。この説は1930年頃に確立し、その後、主流の進化説として現在に至っています。



ダーウィンの進化論
（連続的進化説）
変異の連続性
自然選択説



総合進化論（ネオ・ダーウィニズム）
（段階的進化説・断続平衡説）
突然変異＋自然選択説

「突然変異」は進化に反する

相反する突然変異説と自然選択説を無理やり一つにまとめ上げようとした説（総合進化論）も、その後の分子生物学による遺伝子研究の進展にともない、正当性の根拠を失うことになりました。「総合進化論（ネオ・ダーウィニズム）」においては突然変異が進化の主役とされ、突然変異こそが進化の唯一の原動力とされてきました。生物は突然変異の積み上げによって進化したと考えられてきました。しかし現在の分子生物学では、突然変異は進化を進めどころか、反対に進化を妨害・阻害することを立証しています。

「突然変異が発生してこれまでにない生物が誕生するようになり、その中から環境に適したものが生き延びていく」——こうした形で進化が促されるというのが総合進化論のストーリーですが、自然界の中で突然変異によって発生した変種（異常種）は、生き延びることができないことが明らかにされたのです。突然変異によって発生した変種は、種の維持に反するもの（大敵）として、自然淘汰されてしまいます。これは突然変異によって発生した遺伝情報は、子孫には伝えられない（遺伝しない）ということの意味しています。

進化論者は、長い期間にはいくつかの有益な突然変異もあると主張しますが、実際には突然変異という異常な出来事を通して有益な進化がもたらされることはありません。現在では、唯物論的進化論の正当性を証明する根拠は見当たらなくなっています。

神による「種の創造」に、軍配が上がりつつある

進化論という言葉が意味しているのは、「神が生物・人間を創造したのではなく、物質世界・自然界の中で発生した偶然によって進化が促され、多種類の生物が存在するようになった」ということです。進化論では、「生物は偶然がきっかけとなってもとの形が無限に変化し、新しい生物が次々と発生するようになる」と考えます。キリスト教もスピリチュアリズムも種の実在を主張しますが、進化論では一つの種は次々と別の種に変化していくと考えるた

め、固定した種の存在を認めません。

キリスト教もスピリチュアリズムも、「種」は神が定めた生物界のルールであると考えます。進化論では地球上の多種類の生物は進化というプロセスによって形成されるようになったとし、キリスト教では神が種ごとに多種類の生物を創造されたと考え、この点で真っ向から対立することになります。分子生物学という最新の科学は、突然変異による進化ではなく、神による種の創造の方に軍配を上げつつあるのです。



【3】スピリチュアリズムの創造論

——神による生物界創造のプロセス

すべての生物は神の計画によって創造された
——偶然に発生した生命はない

エントロピー増大の法則（*物理法則の一つ）によるなら、宇宙や地球は、純粋な物質だけが存在する無生命の物質世界になっていたはずでした。無神論者や唯物論者の中には、宇宙の進化の過程で偶然に生命誕生の条件が整い生物が発生するようになったと主張する者がいます。

ではなぜ、そうした物質世界では考えられないような条件が整ったのかを考えると、とても“偶然”という言葉では説明できなくなります。「神」という知的設計者がいて、その神が「このような存在物を造ろう」というデザイン（計画）を描き、それに向けての働きかけをしたために奇跡的な生命発生の条件が整うことになったと考える方が、ずっと論理的です。「神」という知的設計者が創造したと考える方が、はるかに整合性があります。偶然に奇跡的なことが発生したと考えるのは、あまりにも不合理です。

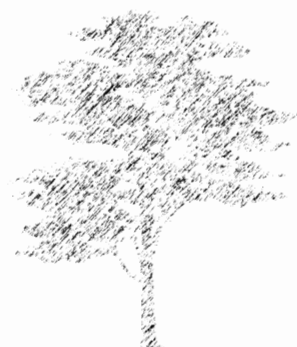
物質的条件が完璧に整っても、そこから生命が発生するようなことはありません。今後どれほど科学が発達しても、無生命世界から生命を誕生させることは決してできません。いったん死んだ人間を生き返らせるようなことは絶対にできません。「生命とは何か？」という一番本質的・根源的な問題が、どこまでいっても付きまとうことになるのです。

生命体も生物界も「神の意志」によって創造されたとしか考えられません。電子の質量がわずか1パーセント違っただけでも、中性子の質量がわずか0.1パーセント違っただけでも、地球上の生命体・人間は存在できなくなります。それほど絶妙な条件のもとで生命体は存在しているのです。

神の中に、種と個々のイメージが
先行存在していた

スピリチュアリズムは生物の進化に対して、どのように考えているのでしょうか。生物発生の歴史を概観すると、明らかに低次元の生物から出発し、徐々に次元が上がって最後に私たち人間種（ヒト）に至ったように見えます。一見すると確かに進化のプロセスのようなものが遺されているように思われます。

しかしスピリチュアリズムでは、唯物的進化論のように偶然の積み重ねで多数の種が存在するようになったとは考えません。言うまでもなく生物のすべての種は、「神によって創造されたもの」と考えます。種どころか一つ一つの個体それ自体も、「神の意図・イメージによって創造されたもの」とします。神が生物の種ならびに個々の存在を創造するに際しては、神の意識の中にそれらの明確なイメージが先行形成されていたということなのです。すべてが神の計画と意図に基づいて行われた結果、地球上に数多くの生物種と個々の生物が存在するようになったのです。



神による、低次元生命から 高次元生命への段階的創造

——スピリチュアリズムの生物創造論

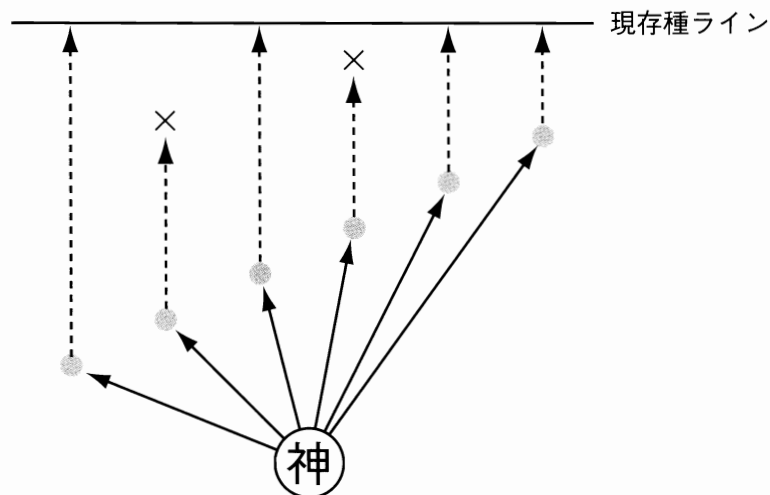
神は、生物を「種」に区分して、そこに属する「個々の存在」を創造されました。そうした種と個々のイメージが、神の中にあらかじめ描かれていたのです。神は、低次元の生物から徐々に次元を高めた生物へと創造プロセスを進め、最後に人間種（ヒト）を創造しようと計画を立てました。そうした神のイメージ・計画に基づいて、低次元の生物から高次元の生物へと生物の創造が進められていき、最後に人間という最高次元の生物の創造が完了したのです。

こうした「種ごとに創造していく」といったプロセスの中では、ダーウィンの進化論が想定するような中間形態はもともと存在していません。“中間化石”が出土しないのは、そのためです。神が計画し

て創造した生物の化石が出土するだけです。神が創造した生物の中には、恐竜のようにかつては生存していたが絶滅して、化石のみが遺されているものもあります。

以上が、スピリチュアリズムの考える「神による生物創造論」です。生物種の創造は、低次元から出発して徐々に高次元化していくため、一見すると段階的進化論のように映ります。しかし自然現象の突然変異が原動力となっているのではなく、「神の計画と意図に基づいて一つ一つがゼロから創造されている」という点で根本的に異なります。サルはサルとして神によって造られ、原人は原人として神によって造られ、人間種（ヒト）は人間種（ヒト）として神によって造られたのです。

スピリチュアリズムの生物創造論を図示すると、次のようになります。



きわめて特殊な人間の創造

神のイメージ・構想の中には、生物創造論の特別なケースも計画されていました。それが人間の創造です。人間の創造には、それ以前の動物種の創造には全くなかった要素が付け加えられました。神によって特別に加えられた要素とは「霊的要素」です。人間以外の生物には霊的要素はありません。神は人間にのみ霊的要素を付与し、永遠の個別的な存在としました。地球上の生物創造の計画の中で、人間は最後に他の生物とは全く異なった生物——「霊的存在」として創造されることになったのです。

こうした神の計画のもとで、人間は特別な存在として最後に創造され誕生することになりました。

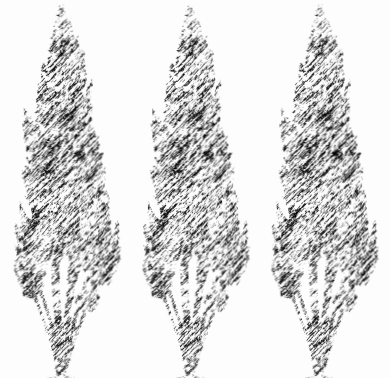
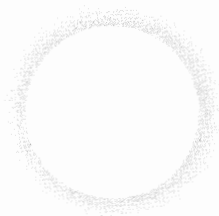
※シルバーバーチは、時に「進化論」を認めているような言い方をすることがあります。人間の肉体本能は動物進化の名残であるとか、人間の肉体は進化の頂点にあるといったような言い方をしています。

しかしシルバーバーチは、決して唯物的な進化論を認

めているわけではありません。シルバーバーチは常に、神が宇宙・万物・全生命を造られたとする「創造論」を主張しています。シルバーバーチの用いる「進化」という言葉には、唯物論者が一般的に考えるような意味はありません。この点を、しっかりと押えておかなければなりません。

先に述べたように、神の中にはこれから造ろうとするすべての生物のイメージがあって、それに基づいて低次元の生物から、徐々に高次元の生物へと創造を進めていったのです。そうした「神の生物創造」のプロセスを振り返ってみると、一歩一歩進化しているように映ります。このようなプロセスの全体を、シルバーバーチは「進化」という言葉で表現したのです。

神が人間を創造するとき、“人間の肉体”はそれまでの生物創造プロセスにおいて一番高次元の“サルの肉体”に似せて造り、そこに人間独自の「霊的要素」を付与しました。このためサルと人間の肉体は、動物の中で最も似ることになったのです。サルの肉体が連続進化した結果、人間の肉体になったということではありません。



『続スピリチュアリズム入門』(新版)

高級霊訓が明かす霊的真理のエッセンス & 霊的成長の道

しばらく待っていただいております『続スピリチュアリズム入門』(新版)を、8月半ばに発行することができました。それ以来、多くの皆様からご注文やご感想をお寄せいただき、ありがとうございます。

この『続スピリチュアリズム入門』(新版)は、先に発行した『スピリチュアリズム入門』(新版)とともに、高級霊訓を正しく理解していただくためのガイドブックとして出版したものです。一人でも多くの方々が本書を十分に活用して高級霊訓の内容を深く理解し、実りある霊的人生を歩んでくださることを心から願っています。

今号では『続スピリチュアリズム入門』の中から、「はじめに」と第3部・第7章「霊性教育について」をご紹介します。

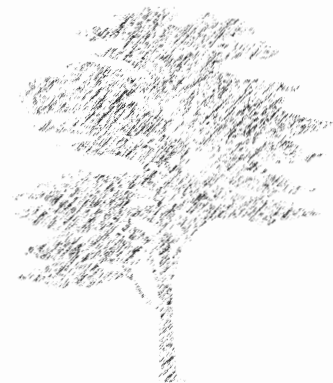
はじめに

スピリチュアリズムと霊的真理

『スピリチュアリズム入門』では、高級霊による歴史上最大規模の人類救済プロジェクトが“スピリチュアリズム”という形で展開されていることを述べました。そしてそのスピリチュアリズムによって明らかにされた死後の世界の様子と、私たち人間の死後の行く末について見てきました。

高級霊による人類の救いは、「霊的真理」を地上にもたらすことによってなされます。死後の世界についての無知、すなわち「霊的無知」が地球上に悲劇を発生させ、それと同時に地球人類の霊的成長を妨げてきました。霊的無知が地球を暗黒世界に陥れてきた“元凶”なのです。

霊的真理は、その元凶を駆逐する最強の手段となります。もちろんこれまでも、宗教・哲学・思想を通して真理が地上に伝えられてきました。しかしそれは霊的真理全体から見ると、あまりにも一部分にすぎませんでした。またせつかくの霊的真理も、人間の物欲や宗教組織のエゴによってすっかり汚され、さらには時代を経る中で別物にすり替えられてしまいました。地上世界には現在に至るまで、真に人類に“霊的救い”をもたらすことのできる宗教は存在しませんでした。霊界の高級霊によって認められる本物の宗教は存在しませんでした。そのため地球人類は、いかに献身的に信仰に励んでも、ストレートに霊的成長の道を歩むことができずにきたのです。



『スピリチュアリズム入門』でも述べましたが、人類を救済する霊的真理は「優れた霊界通信」を通してもたらされます。優れた霊界通信は、まさに高級霊界の意志を凝縮したものと言えます。高級霊による霊界通信の中でも『シルバーバーチの霊訓』・モーゼスの『霊訓』・カルデックの『霊の書』の世界三大霊訓は、特に優れた超一級品です。これら“三大霊訓”によって、今日まで地球人類が全く知ることのできなかった数多くの霊的知識が明らかにされています。間違いなく地球人類史上、最上の宗教思想であり、最高の叡智と言えます。

霊界側は、さまざまな困難を克服して「霊的真理」を地上にもたらしました。あとは地上人自身がそれを正しく理解して実行に移し、「霊的成長」をなしていかなければなりません。霊的成長は、すべて地上人みずからの責任において達成すべきものなのです。高級霊界は神の代理者として、地球人類に救いの道を示しました。今後は地球人類が霊的真理を実践して、自分自身と世界を救っていかなければならないのです。

本書の目的

スピリチュアリズムによってもたらされた「霊的真理」は膨大な量に及びます。それを正しく理解し、重点を取り違えずに読み取るのは並大抵のことではありません。気に入った霊訓の一部分だけを取り出してそれで良しとするなら、スピリチュアリズムの正しい理解は得られません。またそうした風潮が支配的になれば、スピリチュアリズムは従来の宗教と同じように墮落の道をたどることにもなりかねません。

人間の好みでつくり上げられたスピリチュアリズムにならないためには、どうしても理性による霊的真理の全体像の理解・体系的理解が不可欠となります。本書ならびに『スピリチュアリズム入門』は、そうした霊的真理の全体像を示すことによってスピリチュアリズムの正しい普及に寄与することを目的としています。

本書の構成

本書は大きく三部に分かれています。第一部では、『スピリチュアリズム入門』で扱うことができなかった重要な思想テーマを取り上げています。『スピリチュアリズム入門』では、人間観・死後の世界観・死後の魂のゆくえを中心軸として霊的真理を整理しましたが、ここでは「神観」「霊界の存在者」「因縁・運命観」「善悪・道徳観」「宗教観」「救済観」といったテーマを中心に霊的真理を説明しています。こうした形で霊的真理のエッセンスを学びます。

第二部では、スピリチュアリズムの実践という観点から霊的真理を整理しています。高級霊による霊界通信を介してもたらされた霊的真理は、理論的知識と実践的知識から成り立っています。第二部は、その実践的知識（霊的真理の実践的部分）の体系的まとめです。すなわち「スピリチュアリズムの実践論」が、この第二部の内容となっています。

第三部では、私たちの身近なテーマについて、スピリチュアリズムの観点から整理しています。私たちの周りにはさまざまな問題がありますが、そのすべてに対して霊的真理は適用されます。ここではそうした身近なテーマの中から重要なものを取り上げ、それらをスピリチュアリズムの観点から、どのように霊的に判断すべきかを学びます。



改訂版（新版）について

『続スピリチュアリズム入門』の発行から、すでに十年が過ぎました。『スピリチュアリズム入門』と同様に、初めはスピリチュアリズムに関心を持った方々に正しく理解していただきたいの思いから、内容の吟味も十分でないまま出版に踏み出すことになってしまいました。

自費出版ということもあり、当初は初版のみで終わるであろうと考えておりましたが、ニューズレターによって「シルバーバーチの霊訓」の宣伝をしていくうちに、『スピリチュアリズム入門』『続スピリチュアリズム入門』を求め方が次第に増えてきました。多くの方々から、本書を通して霊的真理を体系的に深く理解することができるようになって本当によかったとの感謝の声が寄せられる中で、いつの間にか版を重ねることになり十年が経ってしまいました。そこでこの度の再版にあたっては内容をもう一度吟味し、文体・表現を改めて改訂版として出すことにしました。本書は『スピリチュアリズム入門』とは異なり、内容の多くが旧版とは違っています。テーマは同じであっても、大幅に手を入れています。

本書が、スピリチュアリズムを正しく理解するための手助けとなり、霊的真理を実践するための手引きとなるなら幸いです。あとは皆さん方一人ひとりが直接優れた霊界通信（霊的知識・霊的教訓）を読み、その深いところを理解し、地上人生を有意義なものにしてくださることを心から願っています。

※本書の内容についての詳細は、心の道場の第一公式サイト「スピリチュアリズムの思想Ⅱ・Ⅲ」の中に掲載されています。関心のある方は、それをご覧ください。

第七章 霊性教育について

……霊的真理に基づく育児・教育論

育児・教育は、人生の中できわめて大切な活動です。「子供を育てる」ということには、生計を支えるための仕事以上に重要な意味があり、多くの人々が育児・教育で悩みを抱えています。

ここではスピリチュアリズムの「育児・教育（霊性教育）」について見ていきます。

（一）霊性教育とは

——子供の霊的成長を目的とする 育児・教育

霊的人生と霊性教育

地上人生の目的は、「霊的成長」という一言で言い尽くされます。人間は魂を成長させるため、すなわち霊性を高めるために地上に生まれ、地上人生を送っています。霊的成長を促さない地上生活には、何の価値もありません。スピリチュアリズムは、霊的成長の指針となる霊的真理を地上にもたらしました。この霊的真理にそって自分の魂を高める歩みが“霊的人生”なのです。

大人は自らの判断によって、霊的人生を歩むことができます。しかし幼い子供に、それを期待することはできません。子供は親の導きの中で、初めて霊的人生を歩めるようになります。親の指導によって、子供は霊的真理に一致した霊的人生を送ることができるようになるのです。これがスピリチュアリズムの育児・教育であり「霊性教育」です。

霊性教育とは、スピリチュアリズムの霊的真理を育児・教育に応用したものであり、霊的な世界観・人生観・価値観のうえで展開される教育論です。



霊性教育が目指す人間像とは？

育児・教育とは、子供を一定の方向へ導くこと、子供を理想とする目的（人間像）に近づけようとの働きかけです。霊性教育には「霊的真理」という明確な目的と方向性があります。

では「霊性教育」が目的とする人間像とは、どのようなものなのでしょう。それは神の子供・霊的存在としての人格を持った人間、ということです。具体的には——「物欲に翻弄されず、清らかで質素な生活を送り、困っている人々のためには自己犠牲を厭わず手を差し伸べることができる人間」「利他愛の精神と霊的同胞意識を持ち、他人と健全な愛の関係をづくり出すことができる人間」ということです。

最近の育児・教育では、どのような人間像を目指して子供を育てるべきか、という目的性が希薄になっています。多くの育児書が、教育の目的や方向性といった肝心なことにページを割くのではなく、物質的価値観に立ってさまざまな方法論を説くことが中心となっています。

（二）霊性教育の主役は親

——神の代理者としての親の立場

霊性教育の主役は“親”

そもそも教育とは、人生の先輩である親が、何も知らない後輩（子供）に正しい道を示し、正しい行動の仕方を教えることに他なりません。上から働きかけて導くことが教育なのです。したがって“親”こそが霊性教育の主役であり、“親の内容”が霊性教育のすべてを決定する、ということになります。

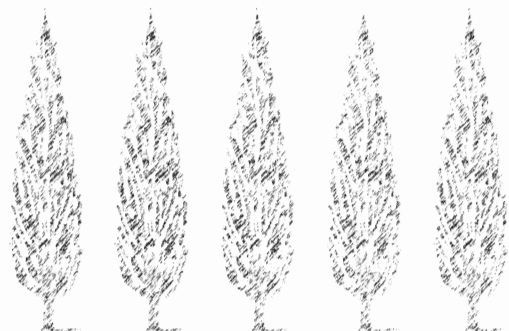
霊性教育では、理屈っぽい教育理論や方法論は、あまり問題にしません。神の前に正しくあろうとする親の誠実な姿勢こそが、何にもまして重要な要素であると考えられます。

親は神の代理者

スピリチュアリズムの育児・教育（霊性教育）では、すべてが「子供の霊的成長を促す」という観点からなされます。「親になる」ということは、子供の霊性を引き上げる役目につくということです。親はそうした使命を果たすことによって、神の創造の業を地上レベルで担当することになります。神に倣^{なら}って子供を生み、子供を育てることによって神の創造の業を達成し、神に近づくことになるのです。言い換えれば——「親は神の代理者として子供の霊性を育てる立場に立つ」ということなのです。

特に子供がまだ小さく、神についての十分な理解を得られない時期（思春期以前）においては、親は「肉体を持った神」として子供に接することになります。その際、親に神のような愛と真理があるなら、子供は親と一体化することによって間接的に神とつながることになります。神の代理者である親を無条件に信じこれに従うことで、子供は円満な霊的成長の歩みをなすことができるようになります。あえて信仰を意識しなくても、無理に祈りをしなくても、また神を自覚できなくても、親を通じて神の愛と霊的栄養素が子供に注がれるようになるのです。

このように霊的真理を知った親に育てられる子供は、親と触れ合う中で神と接することになります。子供にとって親は、まさに「肉体を持った神」であり「神の代理者」なのです。



親の内容いかんで子供の霊的成長が決定する

霊性教育とは、親が神の代理者として進める教育のことです。これは親の内容いかんで子供の霊的成長が決定する、ということを意味しています。霊性教育の結果の大半は、親が「神の代理者」としての内容を、どのくらい実践するかによって決められます。したがって霊性教育では、教育の方法論よりも、親の姿勢と内容が問題とされるのです。

親が神の代理者となるためには、次のような四つの条件を満たすことが必要となります。

- ① 正しい霊的知識（基本的な霊的真理）を教える
- ② 正しい愛を与える
- ③ 正しい手本を示す
- ④ 正しい導き方をする

これらの条件については、(三)と(四)で詳しく取り上げます。

霊的真理を知っていることが、親や教師の“最低条件”

霊性教育とは、「子供を霊的真理にそった人間に育てるための働きかけ」である以上、霊的真理を知らない人間は、子供の教育に携わる資格がないということになります。真理を知らない人間は、子供の親や教師になってはいけないということなのです。

霊的真理は、人間が霊的成長をするうえでの明確な方向性を示しています。「人間は霊的存在であり、単なる肉体だけの存在ではない」「人間は死んですべてが終わりになるのではなく、霊界で永遠に生き続けていく」「モノやお金にとらわれた生き方をしない」「他人のために誠心誠意を尽くすことが最も価値ある生き方である」「人間は利他的行為を通して霊的成長が促されるようになる」——親や教師は、こうした最も基本的な真理を常識として知っていなければなりません。

基本的な霊的真理を知っているということが、親や教師になるための“最低条件”と言えますが、現実にはその最低条件を満たしている人間はほとんど

いません。親になる資格のない者が子供を生み、先生になる資格のない者が人生について教える立場に立っているのです。

(三) 霊性教育の重要な要素

——親が子供に与える“霊的栄養素”

子供の霊的成長を促すためには、親は子供に霊的栄養素を与えなければなりません。その霊的栄養素とは、「正しい霊的知識」「正しい愛」「正しい手本」です。これが神の代理者として、親が子供に与えなければならないものなのです。

正しい霊的知識

親から教えられた知識は、そのまま子供の“潜在意識”の中に刻み込まれて人格の一部となり、その後の人生に大きな影響を与えることとなります。子供は親から与えられた知識を無条件に信じ、一生それを引きずっていくようになります。幼いときに間違った考え方を教え込まれると、大きくなってから正しい人生観・世界観に触れても、もはやそれを受け入れることができなくなってしまいます。このように「正しい霊的知識を教える」ということは、子供の一生を左右する重要なことであり、霊性教育の根幹要素となります。

霊的真理を知らない親に育てられ、間違ったエゴ的人生観・物質的価値観を教え込まれた子供は、本当に気の毒としか言いようがありません。人間にとって魂の成長こそが何より大切なものであることを知らない親に育てられ、この世の富・名声などに価値があると植えつけられた子供は実に不幸です。親としての最も重大な義務と責任は——子供に分かりやすい言葉で繰り返し「基本的な霊的真理」を教えることなのです。

正しい愛

およそ人の親として、我が子をいとおしく思わない者はいません。しかし「霊的成長」という点から見たとき“かわいい”という感情だけで子供に接すると、大きなマイナスを引き起こすことになります。親が子供を思う気持そのものは純粋なのですが、その思いの根底には、しばしば本能的な“利己性”が存在しています。強い母性愛には“子供は自分のもの”という所有観念がともなっていることが多く、本当の愛・利他的愛とは言えません。

子供の肉体はたしかに両親によってもたらされましたが、「霊（魂）」は神によって与えられたものです。霊こそ人間の本质である以上、生まれた子供は両親のものである前に「神のもの」なのです。神から、立派な人間に育てるようにと授けられたのが子供なのです。したがって子供は「神からの授かりもの」と考えるべきです。子供を“自分のもの”と考えることは間違いです。神の前にあっては、自分も我が子も等しい神の子供であり、同等の霊的価値を持った存在なのです。

親としての正しい愛は——我が子に対して、神から一時的に預かった「神の子供」であることを自覚し、「子供の霊的成長を第一に願う」ところから始まります。そして子供の霊的成長のためなら“どのような犠牲も厭わない”という決心ならびに具体的な実践の中に示されます。また親としての正しい愛は、子供の霊的成長のために神と守護霊に導きと援助を願い出る“謙虚な祈り”として示されます。真実の愛には、必ず真剣な祈りがともなうようになるのです。

これらのすべてがあるとき、親は正しい愛を子供に与えたことになります。「霊的な愛・真実の愛」で子供を愛したことになるのです。

正しい手本

親の生き方は、子供にとっての生きて手本となります。親が霊的人生を真摯に歩む姿を見せていくことが、そのまま「霊性教育」の方法となるのです。ああしろ、こうしろと強制したり、押し付けることよりも、親が「正しい手本」を見せることが重要であり、それが最も効果的な教育方法なのです。

こうした意味で、親は子供にとっての良き人生の先輩となるために、日頃から内面の努力を怠ってはなりません。口先だけで子供に教えようとするよりも、親が良き信仰者の見本を示すことが大切です。この世の欲や富に翻弄されることなく質素な生活を送り、常に人助けを心がける生き方こそが、子供に霊的成長のための“霊的栄養素”を与えることになるのです。そしてそれが子供の実行力・実践力を引き出すことになるのです。



(四) 霊性教育の進め方 ——摂理にそった正しい子供の導き方

子供を霊的視野から見る

親は、常に「霊的真理」を通して子供を見ていなければなりません。まず、我が子といえども自分と等しい人格を持っていること、自分の所有物ではないことを、しっかりと知らなければなりません。子供は霊的成長のために、親を選んで生まれてきました。親は、そうした我が子の霊的成長の手助けをすることが役目なのです。

一方、子供にも「守護霊」がいて、絶えず必要な導きをしてくれています。したがって何もかも親が責任を持たなければならないということではありません。全力を尽くしても自分の手の届かないところは、この守護霊の導きに委ねるといふ姿勢が必要となります。

自己の感情に流されない

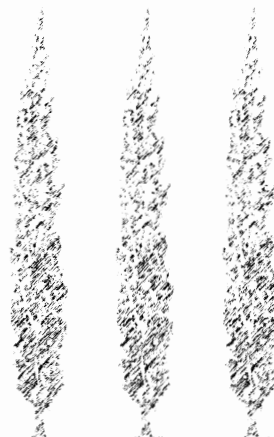
育児・教育に熱心な親は、とかく我が子を自分の所有物のように考え、手のかけ過ぎや過剰な干渉をしがちです。それが子供の自立心の発達を遅らせ、魂の成長を阻害してしまうこととなります。子供のためと考えていても、結局そうした親は自分の思いどおりにならないと気が済まなくなり、子供を束縛するようになります。そして子供が自分に従わなければイライラし、疲れ果ててしまうこととなります。

これでは子供は、まるでロボットか親のペットのようなものです。子供に対するこうした接し方は、一見すると子供を愛しているように映りますが、それは自分の好みの押しつけであり、親の“エゴ（利己愛）”にすぎません。

また、子供かわいさのあまり、子供の言うことなら何でも聞いてしまう親もいます。子供のひどいわがままに対しても注意するどころか、子供の言いなりになってしまいます。そうした親の中には、“強く注意すれば子供の心が歪んでしまう”といった間違った教育観を持っている人がいます。この甘やかし過ぎも、親の“所有欲”から発しています。子供

の自立心の発達を遅らせ、依存心のみを大きくし、いつまでも子供を幼い精神状態のままにとどまらせてしまいます。これでは到底、正しい親とは言えません。

我が子といえども「神の子供」であり、神から与えられた人格を持っていることを忘れてはなりません。親は、神から子供の霊的成長の援助を託されているという事実を、心に刻み込んでおかなければならないのです。



子供の自然な欲求を尊重する

子育てのすべてを自分でしよう、と考えるべきではありません。子供は、生まれつき神から与えられている“霊的本能”によって自然な形で成長の道を歩んでいくようになっていきます。したがって基本的には、子供の自由な意志に任せておけばよい、ということになります。自分から先に手を貸すのではなく、子供の欲求に合わせて「霊的成長にプラスとなるもの」を与えればよいのです。

子供の霊的成長にとって必要なものは、子供自身が要求するようになっていきます。例えば霊的成長にとって多くの愛を受けることが必要なときには、自然と愛を求めようようになります。それは肉体の成長にとって必要なものが、そのつど欲求となって現れるのと同じことです。子供が愛を求めてきたときには、しっかりと受け止め、心が満足するまで愛を与えることによって自然な形で霊的成長が促されるようになります。

それに対して「甘えることはよくない。甘えは罪あらわの顕れであり、そのまま受け入れれば、わがままな子供になる。自立心の弱い子供になる」というような間違った考え方によって、無理やり親から引き離したり、欲求を拒絶することがあります。そうした霊的本性に反する不自然な対し方は、子供の心にキズを残し、異常さを生み出すこととなります。従来の欧米の育児・教育には、このような傾向が見られます。

子供の“霊的自立”——霊性教育の終了

正しい内容を持った親に育てられた子供は、順調に霊的成長の道を歩み、やがて霊的に自立する時を迎えることとなります。子供自身が真理を求め、自らの判断で善と悪を見極め、自発的に霊的コントロールの努力を始めるようになります。また寂しいときには、自分から神に愛を求めようようになります。

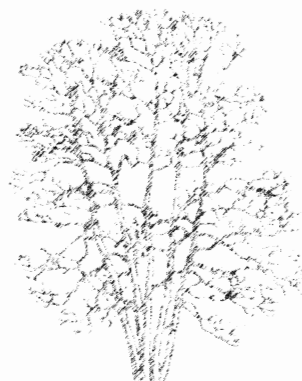
子供がこうした段階に至れば、親は「肉体を持った神」の立場を離れ、神のもとにあって「同じ霊的兄弟（姉妹）」の立場に立つようになります。その時点で霊性教育は終了することになるのです。

(五) カルマの法則と霊性教育の結果

再生者のカルマ清算に協力する

子供には「再生者」という重大な一面があります。この点から育児・教育を考えることも大切です。私たちの多くがカルマ清算のために再生人生を歩んでいるのと同様に、子供も前世でつくってしまったカルマを償うために地上に生まれてきた可能性があります。そして再生人生では、潜在していたカルマが、肉体の成長にともない徐々に表面化してくるようになります。時にはそのカルマが、成育とともに“性格の悪さ”として現れてくることもあります。

そうした場合「霊性教育」は、再生霊の性向を矯正し、カルマ清算に協力することになります。正しい霊性教育によって、内在していた悪いカルマが早めに切られるようなこともあります。



苦しむ子供に対しては、広い心で臨む

子供が大きなカルマを持っているような場合には、それが成長過程で、さまざまな困難やトラブルとして発現するようになります。あるいは先天的な障害やハンディを背負って生まれてくることもあります。

子供がそうしたカルマによる試練に遭遇したときには、親はその苦しみをやっきになって取り除こうとしたり、何としてでも避けさせようとはなりません。苦しむ我が子の姿を見るのはとても辛いことですが、そのようなときこそ「霊的真理」を依りどころに、広い心で子供に臨まなければなりません。子供が苦しみに堂々と立ち向かい、乗り越えることができるようにアドバイスしたり、陰で祈り続けるのです。

霊性教育には、必ず“真剣な祈り”がともないます。それこそが賢明な親の姿勢であり、正しい接し方です。親は自分の感情に盲目的に流されることなく、常に霊的視野に立ち、リラックスして子供に臨むべきなのです。

「霊性教育」の結果について

多くの子供が何らかのカルマを抱え、再生者として地上に誕生しています。このカルマが障害になり、思うように霊性教育が進んでいかないことがあります。子供の先天的なカルマによって、しばしば霊性教育の結果が左右されます。そのうえ子供を取り巻く環境は、物質主義と利己主義一色に覆われているため、子供は容易に悪い影響を受けてしまいます。こうした現実には、真剣に霊性教育に取り組んでいる親に、大きな悲しみと失望を与えることとなります。

一部の人間だけに「霊的真理」が普及している二十一世紀では、完璧な霊性教育を実行することは、ほとんど不可能と言えます。霊性教育の完全な定着は、今後、何百年もの長い期間を懸けて達成していく人類共通の課題なのです。現在の“親”に要求されるのは——「霊的真理に従ってベストを尽くす。霊的真理にそった正しい親を目指して精いっぱい努力する」ということだけです。

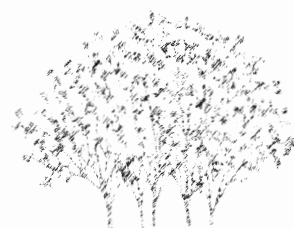
そうした努力こそが、実は結果よりも重要なことなのです。子供のカルマや社会環境が及ぼす悪影響は、ある意味で親の努力の範疇^{ほんちゆう}を超えています。いくら努力しても、さまざまなマイナス要因が絡んで、結果的に子供が霊的真理から外れた道を歩むようになってしまうかもしれません。しかし、たとえそうであっても“親”としてベストを尽くしたなら、神の目には「最高の親」として映ることになるのです。

あとは子供自身の問題です。子供にも守護霊がいて、本人に最もふさわしい導きをしてくれている事実を思い出し、守護霊を信頼して大きく委ねることが必要となるのです。

霊性教育を通して親も霊的成長をする

霊性教育によって成長するのは、子供だけではありません。実は子供を育て導く親自身が、利他愛実践の訓練を受けることによって“愛の人格性”が高められ、霊的成長が促されるようになります。育児・教育は、利他愛実践の一つのパートなのです。この意味からすれば、たとえ実子でなくてもよいのです。他人の子供を利他愛で愛し、世話をし、育てるなら霊的成長がもたらされるようになるのです。

これは生前、子供に恵まれなかった女性が死後、幽界で子供たちの世話をする仕事について霊的成長の道を歩むようになるのと同じことです。人間は霊の親である“神”に倣って、自分より若い人間を愛し育てる努力を通して神に近づいていくのです。若い人間を導く努力を通して利他愛を実践し、霊的成長の道を歩むようになっているのです。



“人間の愛が植物を育てる”

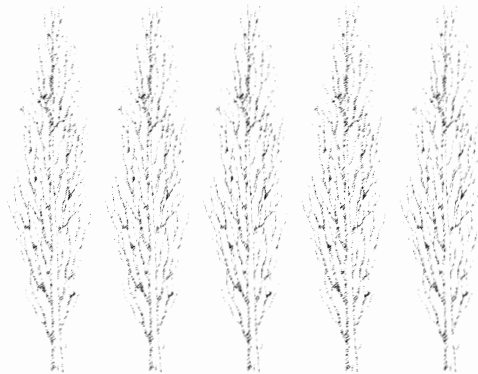
『ツールズ』2009年9月号の巻頭コラムに、たいへん興味深い記事が載っていました。今回はその一部分を紹介します（*『ツールズ』の巻頭コラムは、編集長のトニー・オーツセンが毎号執筆しています）。



これまでチャールズ皇太子は、常にマスコミのからかいの的にされてきました。英国民の中には皇太子を変人で奇妙な人間だと思っている人々が大勢います。それは彼が有機園芸（有機のガーデニング）を推奨したり、共鳴建築への回帰を呼びかけたり、現代医学を批判して補完療法の普及を提唱してきたからです（*“共鳴建築”とは、人間への思いやりをコンセプトにした建築で、現代の主流であるコンクリート建築に反するものを指します）。

皇太子はまた「人間が植物に話しかけると喜びの反応を示したり、植物の成長が促されるようになる」と主張してきました。彼は20年以上も前から「植物に話しかけることはとても重要なことであり、植物は人間の語りかけに確実に応える」と述べてきました。

このほど王立園芸協会（RHS）による実験研究によって、皇太子が長年主張してきたことの正しさが立証されることになりました。RHSは英国サリー州ウィスリーに拠点を置っていますが、最近そこで「トマトの苗に対する人間の声の影響」に関する1ヶ月の研究が行われました。その結果は実に驚くべきものでした。

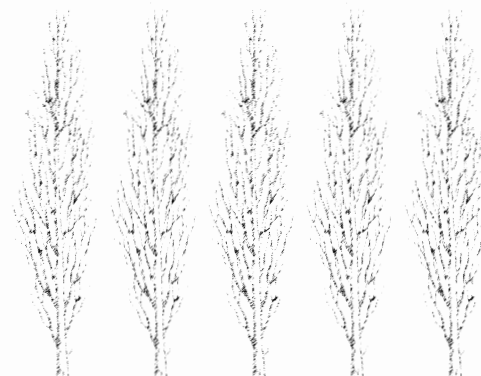


研究はまず、植物にささやきかけてくれる人間の募集から始まり、そのための広告記事が『タイムズ』紙に掲載されました。応募者の中から10人の音質・音声の違う人間が選ばれました。この10人のボランティアによって、シェークスピアの『真夏の夜の夢』、ダーウィンの『種の起源』、ジョン・ウィンダム SF『トリフィド時代—食人植物の恐怖』の一節が朗読され、それが録音されました。

そして次に、その録音した音声を植物に聞かせました。植木鉢の根の高さのところにMP3プレーヤーのヘッドホンが取り付けられました。被験植物は同じ温室に置かれ、実験の前期・中期・後期ごとに、それぞれの背丈が計測されました。一方、比較対照のために、音声を何も聞かせない植物も同時に温室に準備されました。

実験の結果、チャールズ・ダーウィンの子孫のサラ・ダーウィン女史が『種の起源』を朗読したものを聞かせたときに、植物の成長率が一番高かったことが明らかになりました。その植物は、音声を聞かせなかった対照植物の中で最も成長率の良かったものと比べ、およそ3分の2インチ（約1.68cm）も背丈が高くなっていました。

実験の後で、サラは次のように述べています。「私の声がトマトの成長を促すことになったのは、本当に光栄なことです。私は長年（自然史博物館で）ガラパゴス諸島から採取してきた野生のトマトの研究をしてきました。私の音声が植物にとって心地よかったためか、あるいは『種の起源』の内容が影響を及ぼしたのかは分かりませんが、いずれにしても植物を目覚めさせ、意識を喚起させることになったことは、たいへん意義深い出来事でした。」



庭園監督でこの実験の責任者でもあるコリン・クロスビーは、次のように語っています。

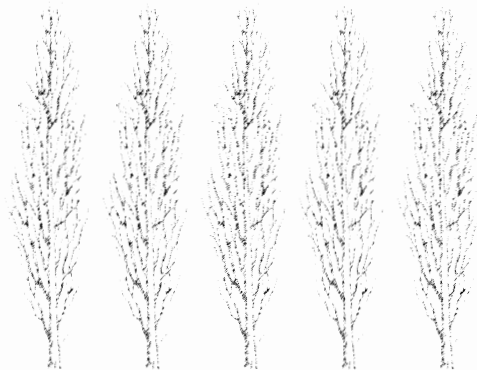
「“どのようにして種しゅが生まれたのか？”という話の内容には、植物に反応を引き起こすような何らかの素晴らしくて心地よいものがあつたのかもしれませんが。サラの声にどのような不思議な特性があるのかは正確には説明できませんが、彼女の声の高さや音色にそうさせる何らかの要素があるに違いありません。またこの研究で、男性の声よりも女性の声の方が、植物の成長を促すのに有効だということも分かりました。

私は長年、植物は人間の励ましの声に応えると確信してきました。今もそれを固く信じています。私は常に植物に話しかけていますし、おそらくほとんどの庭師にも、こうした体験があるはずで。人間はやさしく植物に話しかけたり、脅しのようなきつい言葉を投げかけていますが、そのたびに植物は異なった反応をしているのです。」

最近の研究では、植物と音楽の関係に注目が集まっています。2年前、韓国の科学者がベートーヴェンのソナタ“月光”を聞かせたところ、稲の成長が促進され、開花時期が早まることを発見しました。RHS（王立園芸協会）は、植物が人の声に応えることが事実であることを公表しています。今後は、「なぜ女性の方が男性よりも好まれるのか？」についての研究が待たれます。

あえて私（トニー・オーツセン）に言わせてもらうなら、その答えは、「普段から女性の方が男性よりもお喋りだから」ということになります。こんなことを口走ると裏通りから、「余計なお世話よ！」とやじられそうですが……。

(以上、『ツールズ』のコラムより)

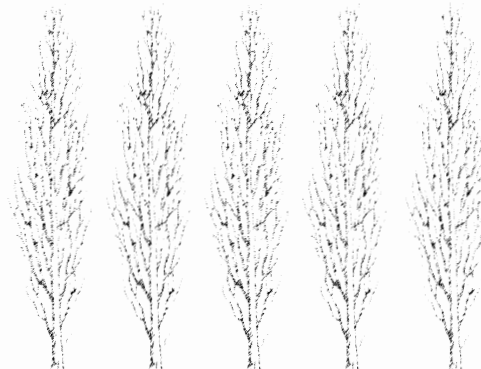


何十年も前から、サボテンなどの植物が人間の感情に反応していることが、しばしば指摘されてきました。サボテンにウソ発見機を接続した実験で、人間が悪感情を持つと、サボテンにマイナスの反応が発生することが確かめられてきました。シルバーパーチは交霊会で、人間の感情に植物が反応することについての質問を受け、「植物には人間や動物とは次元の異なるある種の意識のようなものが存在する」と述べています。

植物が人間の感情に感応するのは、生命反応の一種と考えられます。神は人間と自然界が調和の中で共存し、愛の世界をつくるように創造されました。そのため人間と自然界の存在物（植物）との間に愛とエネルギーの交流が成立するようになりました。植物が人間の感情や愛の思いに反応するのは、こうした神の意図があったからなのです。

それにしてもチャールズ・ダーウィンの子孫の音声は植物の成長を促したという話は、とても興味深いものです。今回のニューズレターは、たまたまダーウィンの進化論を取り上げましたが、ダーウィンは生前、スピリチュアリズムに対してあまり好意的ではありませんでした。霊的真理に照らしてみるなら、ダーウィンの霊性はそれほど高くはなかったということになります。

ダーウィンと比べ、子孫のサラ・ダーウィンの霊性は優れているように思われます。ダーウィンが現代に生きていて『種の起源』を朗読して聞かせても、おそらく植物は何も反応しないでしょう。サラ・ダーウィンという人間の音声から発せられる高い霊性の波動が、植物の成長を促すようになったものと思われます。



スピリチュアリズム・ビデオ&テープ
ライブラリー

VIDEO&DVD

『地球人類の霊性進化の道
“スピリチュアリズム”』

— 霊的真理のエッセンス・真理編 —

ビデオ

(価格)

「真理編・前編」 2時間テープ 1本……2,000円

「真理編・後編」 2時間テープ 2本……3,500円

※ビデオは、VHSとS-VHSの2つのタイプがあります。どちらかをご指定ください。
S-VHSのタイプの方が、よりきれいに映りますが、専用デッキでないと再生できません
のでご注意ください。

DVD

「真理編・前編」
「真理編・後編」 > 2時間DVD 3枚セット (価格)
(合計5時間30分) ……5,500円

※いずれも別途、送料がかかります。

C D

朗読CD

「スピリチュアリズム入門」(新版) 74分 CD 5枚……………3,000円

※製作準備中

「続スピリチュアリズム入門」(新版) 74分 CD 7枚……………4,000円

※製作準備中

「500に及ぶあの世からの現地報告」(改訂新版)

74分 CD 10枚……………5,500円

※製作準備中

※いずれも別途、送料がかかります。

★朗読CDにつきましては、現在すべて製作準備中のため、欠品となっています。

∞ スピリチュアリズム・ライブラリー ∞

スピリチュアリズム・サークル「心の道場」では、スピリチュアリズム精選シリーズとして、下記の本を自費出版しています。

- ◆スピリチュアリズム入門（新版・219頁）
ースピリチュアリズムが明かす心霊現象のメカニズム&素晴らしい死後の世界ー
- ◆続スピリチュアリズム入門（新版・275頁）
ー高級霊訓が明かす霊的真理のエッセンス&霊的成長の道ー
- ◆霊媒の書（297頁）
スピリチュアリズムの真髄「現象編」
『The Mediums' Book』 アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳
- ◆霊の書（357頁）
スピリチュアリズムの真髄「思想編」
『The Spirits' Book』 アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳
- ◆500に及ぶあの世からの現地報告（改訂新版・437頁）
ーエクトプラズムボックスを通じて明らかにされる死の直後の実生活ー
『Life After Death』 ネヴィル・ランダル著／小池 英 訳
- ◆マイヤースの通信ー永遠の大道（全訳）（271頁）（※現在、再版準備中）
『The Road to Immortality』 G・カミンズ著／近藤千雄 訳
- ◆マイヤースの通信ー個人的存在の彼方（全訳）（304頁）
『Beyond Human Personality』 G・カミンズ著／近藤千雄 訳
- ◆霊訓（完訳・上）『The Spirit Teachings』（225頁）
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳
- ◆霊訓（完訳・下）『The Spirit Teachings』（260頁）
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳
- ◆シルバーバーチは語る（443頁）
『Teachings of Silver Birch』 A. W. オースティン編／近藤千雄 訳
- ◆シルバーバーチの霊訓（272頁）
ースピリチュアリズムによる霊性進化の道しるべー
『A Voice in the Wilderness』 トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳
- ◆シルバーバーチの霊訓（281頁）
ー地上人類への最高の福音ー
『The Seed of Truth』 トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳
- ◆シルバーバーチの霊訓 ー霊的新時代の到来ー 『The Spirit Speaks』（301頁）
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳
- ◆スピリチュアル・ヒーリングとホリスティック医学（371頁）
ー霊的エネルギー療法の本質と将来の医学の方向性ー

※日本スピリチュアル・ヒーラーグループ発行

第8回 公開ヒーリングのお知らせ

日本スピリチュアル・ヒーラーグループによる「第8回・公開ヒーリング」の日程が決まりました。今回も一人でも多くの方々に、本物のスピリチュアル・ヒーリングの素晴らしさを体験していただきたいと思っています。

当ヒーラーグループが行っているスピリチュアル・ヒーリングは、霊界の医者（スピリット・ドクター）が治療にあたる「スピリット・ヒーリング」です。スピリット・ヒーリングは、霊界サイドの綿密な準備と配慮のもとで行われます。公開ヒーリングに参加したいと思い、ヒーラーグループに申し込みのご連絡をくださった時点で、ヒーラーを媒介として霊医と患者さんとの間に霊的なパイプ（霊的絆）が築かれるようになります。人によってはその時点から、治療が始まることもあります。そして時には、公開ヒーリングに参加される前に病気が治癒するようなことも起こってきます。公開ヒーリングでは、こうした想像もつかないような動きが発生しますので、当日参加される方だけでなく、参加されない方も、霊医からの働きかけを受けられるようになります。

お申し込みくださったすべての方に、本物のスピリチュアル・ヒーリング（スピリット・ヒーリング）を実感していただける最高の機会になることを願っています。

- ◆開催日時 2009年11月29日（日）午後2時～（受付：午後1時30分～）
- ◆会場 “アートフォーラムあざみ野”（横浜市青葉区）2階セミナールーム
- ◆定員 60名（内、直接ヒーリング9名）

<参加の申し込み>

- ◆受付日時 10月2日（金）～11月9日（月） 月・金のみ 午後3時～8時
※上記以外の曜日・時間帯では受付はいたしておりません。
※公開ヒーリングについてのお問い合わせも上記の時間内をお願いいたします。

- 連絡先 日本スピリチュアル・ヒーラーグループ
TEL 052-526-0434（担当：小川・谷口）

詳細については、ヒーラーグループのホームページをご覧ください。

ホームページアドレス <http://www.ne.jp/asahi/sph/hg/>



Spiritualism Circle
Kokoro no Dojo